

## 高橋治氏 宮本憲一氏 ～四高開学120周年記念対談～

平成18年（2006）10月20日（金）夕刻、石川近代文学館において、昭和23年（1948）に四高を卒業された高橋治氏（直木賞作家）・宮本憲一氏（滋賀大学名誉教授）による対談が行われました。直前に学都シンポジウムを終えたばかりという忙しい中、両先生には大変興味深いお話をさせていただきました。

### Q. お二人にとって四高とは？

宮本：四高というのは、私にとっては、人生の幕が開く最初の時期だったんじゃないかっていうふうに思いますね。つまり親からも独立をして自分の考えで歩いていく、そういう第一歩。しかも後から考えてみると、学問研究をはじめの最初の階段だったんじゃないかと思えますね。

高橋：宮本らしい言い方で、確かにその通りなんですけどね。同じことを別な言い方ですれば、四高の三年間が私に人生の余暇を与えてくれたっていうか。

宮本：余暇ですか（笑）。

高橋：無駄にしてよろしいという時間を与えて

くれた。それをその生徒なりに無駄にしないで、見た感じは落第しちゃうと放校されたり、いろんな形があるんだけど、それを結果として自分の人生に役立たせた三年間だったと。そういう学校や人生、余暇を今の青年たちは持っているのかなっていう不安があってね。

宮本：そうだね、それは確かにそうだな。だって高等学校に入ったらどっかの大学に入れるから、別にここで受験勉強をする必要もないしな。

高橋：そうなんだよ（笑）。

宮本：全く朝から晩まで遊んでいたってかまわない（笑）。

高橋：あれがやっぱりすごい制度だと思う。旧制帝大の学生総数の一割増くらいの高高等学校の生徒しか取らなかったんだよね。

宮本：いや少なかったんだよ。旧制の国立の大学の定員よりも、旧制の高高等学校の方が少ない。だからよほど難しいところへ行かない限りは必ず入れるから、みんな遊んでた（笑）。



昭和9年（1934）時習寮記念祭の様子

高橋：だからね、あそこで戦争を一つ終了した  
というのかな（笑）。

宮本：そうそう。だから高等学校へ入れた時は  
一番嬉しかった。これでバンザイだって  
わけだから、みんな（笑）。

高橋：だからね、一、二年遊ぶつもりなら何に  
もしなくてもいいんだよな。あれはすごい  
制度だったと思う。

宮本：飯沢匡が書いてたよ。秀才をバカにする  
機関である、と（笑）。だけどやっぱり  
その高校の間楽しかったよな。そういう  
余裕っていうのが、いま学生にあるかっ  
ていうとね…。

高橋：まあ、あそこ（シンポジウム会場）へチ  
ラチャッと顔を見せて、シンポジウムの中  
にあれだけ同級生が入ってるなんて、  
考えもしなかったんだね。あの連中が、  
やっぱり同じ、種類は違ったりさまは違っ  
たりしても、そういう時間の過ごし方を  
することができたんだよね。それが今の  
七十何年の人生に一種の共通体験として  
ね、生きて残っているんじゃないかね。

宮本：そうだな。

#### Q. 金大生に期待すること

宮本：金沢大学といってもね、僕が教えていた  
時期と今と随分変わっている。私が教え  
ていた時は、金沢城の中にありましたで  
しょう。それからこの旧四高も使ってい  
た。だからそういう意味では、四高と同  
じような立地条件の中にあったからね。  
だから市民との接触も常にあった。そう  
いう時期と、今郊外の非常に離れたとこ  
ろに大学が行ってしまって、そこで生活  
をしている学生の、金沢に対する思いだ  
とか、金沢とは何だろうと考えることは、  
全く違ってきているんじゃないかなと思



現在の旧制第四高等学校校舎（石川近代文学館）

いますね。とはいえ、僕の希望としては  
ね、こんないい街ないんですよ。もちろ  
ん雪が降ってちょっと大変なことはある  
けれども（笑）。ちょうど自分の手のひ  
らの中に街が入っている感じがする。そ  
れから、街のたたずまいだけじゃなくて、  
ここで行われている市民の生活というの  
が目に見える、そういう街ですよ。だか  
ら、この街のよさというのをもっと身に  
つけて欲しいね。それから、金沢とは何  
かっていうことをもう少し考えて調べて  
欲しいなっていうこともある。他の大学  
に比べれば、金沢大学に来たっていうこ  
とは幸福なことじゃないかなと僕は思っ  
てます。だから、できるだけあんまり山  
の中に閉じこもらないで、街へ出ようっ  
ていうことにして欲しいね。

高橋：金沢に、私たちの高等学校、四高があっ  
たってということ、金沢に新しい大学が  
できたってことを直線的に繋ごうと  
すると、さっきのシンポジウムにもあっ  
たようになんかギャップが出てくるんだ  
ね。ギャップっていうのは言葉が悪いけ  
れども、かなり直線的には繋がらないも  
のが残ってしまうわけね。それで、それ  
に対してこだわるとは毛頭無いんで

すよ。私の内面にはね。それよりも、同じ金沢に学ぶ土地を選んだのだったら、ここで百年を越す学校で学んだ人たちが居るわけだから、その人たちに少しでも近づく方向に自分を向けていくことが、一番金沢を学都金沢という、学都を学都たらしめる方法ではないかなと思います。

宮本：冒険心を持ってね。金沢大学なんかは八学部あるわけでしょう。それは非常に恵まれたものです。だから、どんどん他の学部にも出かけて行って、講義を聴いて、単位が取れなくても講義を聞いてほしい。好奇心が無いんだよな、今の学生ね。これが一番僕気になっているんだ。もっとその大学に入ったばかりの頃だったら、好奇心があると思うんだ。普通はね。だから、他の学部でおもしろそうな先生がいたらそこへ講義を聴きに行くと。いろいろそれで他学部の学生と議論するというね。総合大学のいいところはそこにあるんでね。それを自分の殻の中にちんと閉じこもるんじゃなくてね。さっき街へ出ようと言ったけれども、街へ出るだけじゃなくて、大学の中でもね、自分の学部を超えて、そうすると金沢大学というものの全体像、あるいはよさというのが分かってくるんだと思うのね。四高なんか理科も文科も小さかったからね。学校として小さいから理科とか文科も超えて、みんな友人になって。あるいはいろんなサークルで知り合ってたわけだけど。そういう、友達にしても、あるいは教師に対する好奇心といたらいいかがあるって遊びに行く。あるいは違う人格とつきあいたい、あるいは違う分野のことを学びたいというのが四高時代の思い出ですね。それがいまも生きている。こういう

ことが、いま学生にとって非常に重要なことです。だから教養なんていうのも別に教えられてできるんじゃないくて、好奇心があり、なんかおもしろそうだからと学ぶうちに自然についてくるんです。自然にね。それをいまの学生の生活に望みたいと思います。

\* 貴重なお話とご意見をお聞かせくださった両先生に深く感謝申し上げます。なお、この対談の様子は「四高開学120周年記念展示—学都金沢と第四高等学校の軌跡—」DVD（非売品）に収録されています。



第四高等学校に市民から寄贈された「Encyclopaedia Britannica[9th ed.]」と書棚